

「天の聖堂」

主任司祭 晴佐久 昌英

パリ滞在中に、フランスのごく普通の教会の主日ミサはどんな様子だろうと、住所で最寄りの小教区教会へ行ってみた。

パリの日曜日の朝に通りを歩いている人は、犬の散歩をしている人か教会へ向かう人かの、どちらかである。ミサを知らせる鐘の音が響く中を老夫婦や子連れの家族が続々と聖堂へ集まるさまは、さすがはカトリック国というべきか。教会離れ著しいフランスではあるけれども、逆にいうとそれでもミサに集う人たちは筋金入りのカトリック信者だということでもある。

聖堂に入ると、五百人は座れそうなベンチがすでにほぼ満席で、みんな沈黙のうちに祈っている。聖域ならではの静寂の中では、自分の靴音の響きさえ気になる。空席を見つけてそっと座ると、隣の人が微笑んで席を詰めてくれた。

やがて侍者が入ってきて、ろうそくに火をつける。いよいよ始まるぞと聖堂全体の期待が高まるのが、独特の気配で分かる。何かとても尊いことが起ころうとしている直前の、聖なる高揚感が、胸の奥で静かにふくらんでいく。

突然、鐘が鳴る。天上からオルガンの音が響き渡り、皆一斉に立ち上がって入祭の歌を歌い始める。大勢の侍者と共に真剣な眼差しで入堂してくる司祭。真心で礼拝するこんな仲間たちとミサを捧げることのできる司祭は、幸せだ。

ふと、子どもころ家族で通った教会を思い出した。あのころは、熱心な信者たちがミサの後も去りがたい様子で祈り続けていた。ひざまずくお年寄りの姿は神々しくもあり、横を通るにも息をひそめたものだ。そうして聖堂からまぶしい外へ出たときの、清々しさ。いのちの本質である死と再生の神秘など、特に教わらなくとも、ぼくは小さいころから知っていた。

教会学校では、聖堂の扉は天国の扉なんだから静かに開けなさいと教わったものだ。なるほどそうして大切に開け続けるうちに、いつの日か本物の天国の扉を開ける日が来るのである。感動なんてものじゃない、開ければそこは天の聖堂なのだ。ああ、父も母も座っている、もはや言葉もない。突然、天使の大軍の入祭の歌。なんてことだ、イエス様が入って来られる！